

こをできるだけきれいさっぱり拭き取りました。その間彼は、服を着てボタンを留めていました。」性的衝動の亢進の表現が優れていなければならないほど、恍惚の瞬間の直後の表現は、いささか拍子抜けした緩慢な日常性に陥らざるをえないのである。

時間的経過と物語性を重視したホガースが、例えば「前と後」のような形で、瞬間性の描写を巧みにすり抜けているのは、それゆえ、きわめて適切であったと言える。性愛文学は、瞬間的帰結点としての恍惚感の表現を実は拒絶されたジャンルと言えらるかも知れない。ちょうど性器を隠す図像が古今東西にわたって多く見られるように、性愛文学は、肝心の瞬間的恍惚感を秘匿する。否、外的規制の如何を問わず、むしろ内的必然的性情から、そうせざるをえないのである。性愛文学における瞬間性の問題は、この意味において、実は広く言語表現一般の特徴をも明らかにしていると言えるのではあるまいか。「理性」を持ち出し、ウェルギリウスに言及し、その他、典拠不明のラテン語を引っ張り出したり賢人論を言い出ししたりしながら、スティールが結局は遠巻きにしか言えなかった核心は、実は当の性愛文学において的確な表現を見出しかねていたのである。

5. エロティカ狂想曲が鳴り響く社会

それにしても、スティールはなぜ、セントリーヴァの『おせっかい』を正面から扱うことなく、コンドーム論から純粋快楽論へと流れてしまったのか。もともと『タトラー』における彼のエッセイの多くは、それほど緊密な論旨を持つものではないが、それにしても第15号のウィルズ・コーヒーハウスでの展開は、やはりいささか不可解である。『おせっかい』の中に、コンドームを具体的に想起させる場面があるわけではないし、彼がこの芝居をことさら批判していたとも考えにくい。それどころかこの作品は、古典的な王政復古演劇の特質と18世紀演劇の新しい傾向を併せ持った注目すべき作品の一つで、当時であっても失敗作というようなものでは決してなかった。

この『タトラー』第15号には、実は多少の後日談がある。10日後の5月24日、第19号の中でスティールは、「以前にも記したが」と前置き

9) Susanna Centlivre, *The Busy Body*, Augustan Reprint Society 19 (Los Angeles: William Andrews Clark Memorial Library, University of California, 1949) を参照。

した上で、もう一度、しかしやはりごく短くこの芝居に触れているのである。それは次のようなものだ。「この芝居の筋立てと出来事には、女性作家ならではの繊細さがあり、これは男性ではなかなかうまく演じられない。男性の場合、恋愛の技法は巧みに作り上げるものであって、女性のように自然と本能の力で生み出すものではないからだ」¹⁰⁾ もちろんこの短評は、男性作家の自己弁護的な言説ではなく、スティールが、性差を意識しつつ、女性ならではの「繊細さ」に一種の美質を感じ取っていたことの表現と考えた方が自然であろう。先のコンドーム発明者への言及は、やはり否定的なものであったのだ。「巧みに作り上げ」られたもの、すなわち“*Invention*”という語が、先の15号にもこの19号にも共通して用いられていることは、コンドームとその人為性、男性性の連鎖をよく示している。

だがここで問題なのは、当のスティールが、その“*Invention*”を単純に斥けることもできなかった、という点だ。彼はコンドームの発明者に一定の賛意を表し、他方、『おせっかい』の「自然」なドラマトゥルギーについてはごく短く済ませている。コンドームのみならず“*Invention*”全般が有する社会的効用を、「自然と本能の力」の前に放棄することは、やはり彼にはどうしてもできなかったのである。これはおそらく、性差の問題にのみ帰結することではあるまい。むしろ、近代社会を推進する人為のものへの信頼と期待でもあったのだ。自然と人為の、このはざまにあって、彼は“*Invention*”をなす者を「尊敬と感謝に値する」と讃えつつ、しかし他方で純粋な快楽を志向してもいたのである。彼の「理性」は、どうやらその結節点にやむなく持ち出されてきたものらしい。

『レーテへの航海記』に見られる主客未分の混沌とした反理性への旅を堪能するには、やはりスティールは、あまりにも不自由であった。その不自由さこそ、彼の遑遑の原因である。だがそれは、核心部分を意図的に回避したり、不注意に見過ぎたりしたために生じたものではない。事実はその逆だ。例えばそういう彼の言葉の実相を自在に逆照射して見せてくれるところに、18世紀性愛文学の豊かさが感じられてならない。

(杏林大学教授)

10) *The Tatler*, ed. Donald F. Bond (Oxford: Clarendon, 1987), vol. 1, p. 154 を参照。

体液のエロスと産婆書の猥褻

—18世紀の医学とエロティカ

鈴木晃仁 Suzuki Akihito

トリム伍長の恋とクック船長のロミロミ

『トリストラム・シャンディ』の第八巻で、トリム伍長が恋に落ちるエピソードが語られている。ランデンの戦闘で膝に傷を負ったトリム伍長は、ベギン会の修道女に看護してもらうことになった。星も夜も献身的に傷ついた脚に温湿布マッサージを施してくれる美しい修道女に、伍長の心は動き始める。そして看病が三週間に涉ったころ、伍長がついに恋に落ちる瞬間がやってくる。

その日、修道女はまず右手の人差し指で伍長の膝の下をマッサージしはじめた。次に中指も添えて二本の指で円を描くようにさする。そして指は三本になり、四本になり、ついに手全体を使ったマッサージが始まる。真っ白な彼女の手を見た時に、トリム伍長の身体は敏感に反応し、彼の顔は紅潮する。彼女のサテンよりも柔らかい白い手が、伍長の太ももに這い上がり、伍長の太ももをこすりこすりこする(rub-rub-rubbing)の応じて、伍長の「恋」は彼女の手の下から全身に広がり、血管には熱い炎が燃えさかる。そして二、三回大きくこすられた時に、伍長はどうとう耐えられなくなり、彼の興奮は絶頂に達してしまう。この話をここまで聞いたトゥビー叔父は、興奮の極に達した伍長が、修道女に自分の思いのたけを打ち明けて恋の告白をしたのだという結末をつけるが、実際のところ、伍長がほとぼらさせたのが恋の思いだけだったと思う読者は少ないだろう。

『トリストラム・シャンディ』は、18世紀の性と生殖の医学の一大パロディと呼ぶことができる作品だが、上に引用した部分も、温湿布マッサージという治療法のパロディであり、18世紀のフィクションにおけるマッサージのエロティック化の最も雄弁な証言である。一方で、現実の経験を記した資料としては、有名なクックの航海記をあげることができる。三度目の航海でタヒチを訪れた時、クックと他の乗組員はタヒチの女性たちから「ロミー」と呼ばれるマッサージを受ける。クック自身は、このマッサージが彼の下半身のリューマチにとってもよく効いたと記しているだけだが、これを経験した別の乗組員は、明らかにエロ

ティックな意味を見出している。この乗組員は、彼にマッサージを施してくれた女性は、四肢の均整、肌の色、顔の造作などどれをとっても、美人ぞろいのタヒチの女たちの中でもずば抜けていたこと、彼女が親しみをこめて微笑みかけ、脚のマッサージをしてくれたことを記している。彼は「極度の官能の満足」を感じたという。

上に紹介した18世紀のマッサージの「二重の意味」についてのエピソードから明らかなように、18世紀の医学と医療は、同時代のエロティックな想像力と経験に大きなインスピレーションを提供してきた。18世紀のエロティカの優れた研究書である Peter Wagner の *Eros Revived* (1988) や Julie Peakman の *Mighty Lewd Books* (2003) においても、医学の役割は重視されている。この小論では、これらのスタンダードな18世紀エロティカの研究書に盛られていない、比較的新しい二つの視点を選んでみたい。一つは医療の実践という視点である。現実には人々が経験した医療はどのようにエロティック化されたのかという、医療実践の社会史の問題である。もう一つは物質文化としての医学書の問題である。18世紀イギリスのエロティカには、当時形成されていた消費社会と物質文化の刻印が深く刻まれており、書物であれ絵画・版画であれ、購買され収集され所蔵されるオブジェクトという性格を持っていた。それと同じように、購買され所蔵された医学書が、人々のエロティックな経験をどのように構造化したのかという問題に光を当ててみたい。

瀉血のエロティシズム

トリム伍長の身も心も蕩かせた温湿布(fomentation)は、当時の理解で言うと、身体の固体部分、特に血管などを柔らかくして膨張しやすくし、その中を体液が流れやすくなるための療法である。タヒチでマッサージを受けた男も、血液が毛細血管を活発にめぐりやすくなったことが効果をもたらしたのだろうと記している。どちらのケースでもポイントとなるのは血液の流れである。血液とその流れが、性交と快楽にとって決定的な意味合いを持っていることは、古典医学の時代か

らヨーロッパの性と生殖の理論の一つの核であった。古代医学理論の四つの体液の中で、血液はそれから精子が作られる体液であり、性と生殖にとって特別な意味を持つ液体であった。生殖だけでなく快感にとっても血液は決定的な役割を果たし、血液が身体の各所により激しく流れ込むことによって、身体は熱くなって性的に興奮した状態になると考えられていた。血液に備わっている「熱」という感覚的な質が、体液の流れと性の興奮の体感とを結び付けていたのである。当然のことながら、18世紀のエロティカは熱くなる身体にあふれている。「今は燃えている私のその場所が私の感覚を乱した」(『ファニー・ヒル』)「ああ! アンジェリカ! あなたは私にすっかり火をつけてしまったわ!」(*Venus in the cloister*)。

このような医学的背景を考慮すれば、血液をほとぼしらせること、具体的には瀉血という依然として日常的に用いられていた医療行為が、男や女の射精(異論も多くあったが、当時の医学では女も射精するという説がいまだに根拠があった)と重ねあわされていたことは不思議なことではない。ちなみに、瀉血の前に、血管を浮き立たせるために、刺絡する部位をマッサージし温湿布を施すこと——トリム伍長が受けた治療そのものである——が一般的だったが、この「摩擦し、熱くして、膨張させた部位から体液を放出させる」というプロセスも、瀉血のエロティック化に貢献しているのかもしれない。

瀉血のエロティックな意味を最も鮮明にした情景としては、サドの『ジュスティヌまたは美德の不幸』の中に描かれている場面が有名である。ジェルナンド伯爵は、妻が気が触れていると偽り、居城の牢獄に閉じ込めて四日に一度のペースで血に二杯ずつの瀉血をしている。「あの女の血が流れると、わたしは陶酔状態に陥ってしまう。妻を別のやり方で楽しんだことは一度もない」と伯爵は言う。伯爵はジュスティヌを全裸にして、天井に結んだ二本のリボンで両腕を持ち上げた姿勢を取らせると、彼女の両腕に刺絡針をさす。彼女の血がほとぼしるのを見た伯爵は興奮して冒瀆的な言葉を吐き、若い男に彼の男根を吸わせる。

この情景はもちろんサドの想像力の産物である。しかし、18世紀において、瀉血にエロティックな意味を見出すことは荒唐無稽な想像ではなかった。そのことを教えてくれる現実世界の出来事として、時代はやや下るが、1823年に大きな

ニュースになった第三代ポーツマス伯爵(1767-1853)の事例を挙げるができる。ポーツマス伯爵は、若年から精神障害を持ち、おそらく性的にも不能であった。彼は多くの奇癖を持っていたが、その一つは、刺絡針を持って自分の屋敷の中や領地の中をさまよひ歩き、出会った女を瀉血したり、あるいは逆に瀉血してもらったりすることであった。例えば屋敷に奉公していた召使の一人は「閣下は私に物を投げつけ、私をぶちました。痛かったかとお尋ねになるのではいと答えますと、私を瀉血しようとしてました。閣下にお取りいただくために、ボウ・ストリートに行って逮捕状を貰ってくる」と申し上げなければなりません」と証言している。その一方で、二人の女性が彼に瀉血をしたことを証言している。「閣下は、脈を取り瀉血するようにと私に仰しゃいました」(A. コウク夫人の証言)。「一度、閣下の脈を取り瀉血してさし上げました。ご褒美に数シリング頂きました。閣下の御腕を拝見した時には、瀉血の痕が一ダースもありました」(セアラ・アダムズの証言)。

この精神障害を持つ貴族が「瀉血ごっこ」をしていたことを、現代の精神医学が診断しようとする、例のごとく無数の意見が出てくるだろう。しかし、伯爵の同時代人にとってはその意味は明々白々であった。それは、性交の代用物に他ならなかった。ポーツマス伯爵の禁治産処分証をまとめた法律家の一人は、「ヴィーナスの貴い賜物に変えて、包帯と刺絡針の惨めで不完全な悦びに耽るような精神を、どう思われますか?」と法廷と陪審に尋ねている。そして、ポーツマス伯爵が瀉血に性交の代替物を見出したことを、「ハーヴィーが血液循環を発見して以来の最大の発見である」と友人への手紙の中でおどけたのは、伯爵の知人でもあったバイロンであった(John Hobhouse 宛、1822年3月19日)。18世紀においては、瀉血が性交の代替であることは、深遠な象徴の問題でも、フロイト的な夢の解釈の問題でもなく、常識的な身体感覚に基づいた簡単明瞭なことであった。アヴェロン野生児の教育で有名な医師イタールは、「ヴィクトール」と名づけられた少年が、思春期を迎えて性に目覚め煩悶しているのを見かね、当たり前のように彼を瀉血している。

発情させる産婆術書

医学的なテキスト、特に性と生殖についてのテ

キストが、エロティックな目的に利用されることは18世紀のイギリスに限られたことではもちろんない。医学書がエロティックな脈絡の中で利用されるという現実も、またその利用を見込んで医学を装ったエロティックなテキストが書かれるという現実も、時代と地域を通じて頻りに観察される。医学は身体に関する学知であり、医学書の中には性と生殖についてのリアルな記述が含まれていることを考えると、このことは特に驚くようなことではない。

18世紀のイングランドでは、産婆術にまつわる書物が、エロティックな目的のために用いられ、その目的を織り込んで出版された書物も多いことは、歴史家たちによってつとに指摘されている。例えば『アリストテレス宝典』*Aristotle's Masterpiece*と銘打たれた一群のテキスト群は、1680年代から内容をさまざまに変えながら18世紀を通じて20世紀まで出版され続けたイギリスやアメリカなど英語圏のベストセラーである。フランスではニコラ・ヴェネットの『結婚愛』*Tableau de l'amour conjugal*が1696年の初出以降、似たような地位を保ち、英語にも何度か訳された。これらの書物は価格も安く、読者層・購買層として民衆をターゲットに含んでいた。その言葉遣いも、例えば性交のあとに体力を回復することが必要であることを、作物を収穫した後の土地に肥やしをすきこむことに喩えている箇所や、怪物(monster)の胎児の出生を、治金の時に不純物がまじるとうまくいかないという比喩で説明する箇所などは、性と生殖の知識を農民や職人の日常の経験にマッチさせたものであった。これらの書物は、神話や年代記、あるいは初期近代の「驚異の物語」から興味深い逸話を縦横に引用したものであり、産婆術についての同時代のよりハイブライドで専門的なテキストが、直接観察された事実を圧倒的な重心を置いているのと対照的であった。しかしその一方で、同じ民間向けの書物であっても、「男根を立てるためには、コストの根を蜂蜜入りの酒で飲むこと、サフランを飲むこと、亜麻仁を蜂蜜と胡椒とともに飲むこと、ゆでたカブを食べること...」といった、処方羅列だけのジャンルのテキストに較べて、『アリストテレス宝典』の作品群やヴェネットの『結婚愛』などは、性器のリアルな記述を含んでいたことに大きな特徴がある。

これらの書物が実際にエロティックな目的のために使われた、興味深い18世紀の記録が二つ発

見されている。一つは、1684年にサマーセットで生まれ、後に収税吏になったジョン・キャンノンの自伝である。キャンノンの最初期の性の経験は、母親が持っていた二冊の産婆術の書物だった。一冊は、17世紀に無数のラテン語の医学書を翻訳し剽窃したことで名高いニコラス・カルペパーの『産婆指南書』であり、もう一冊はいずれかの版の『アリストテレス宝典』であった。10代の半ば、読み書きと算数と簡単なラテン語を学んだキャンノンは「自然の秘密」についての欲望を抑えきれず、母親が持っていた産婆術の書物をくすねてこっそりマスターベーションをしていた。これを母親に見つけられてその書物を取り上げられたキャンノンは、家のトイレの壁に穴をうがち、家で雇っているサーヴァントたちを覗いてはマスターベーションをすることを覚えたという。

産婆術書を用いたキャンノン少年のエロティックな経験は、母親に秘密の行為を見つかるという個人的に赤面するだけの事件で済んでいた。しかし、18世紀アメリカのマサチューセッツにあるノーサンプトン村においては、ことははるかに大きくなった。ノーサンプトンの牧師、ジョン・エドワードは、1744年に教区の若者たちが産婆術の書物を読んだ「好色で猥褻な口説」を読んでいることを発見する。この書物のうち一冊は『アリストテレス宝典』のうちのいずれかの版であり、一冊はトマス・ドークスの『産婆正則書』(*The Midwife Rightly Instructed*, 1736)、残りの一冊は特定されていないが、女性の身体の挿絵が入っていた書物であったという。エドワード牧師が書きとめているところによれば、村の男たちはこれらの産婆術の書物を読んで興奮し、若い女性たちに不適切な行いをしかけ、淫らな言葉を吐いていた。例えば三人の男たちが一緒になって、二人の女性(そのうち一人はアフリカ系アメリカ人の召使であった)の前で、産婆術の書物を大声で読み、彼女たちを欄でキスしようとした事件が起きた。あるいは、男たちは、産婆術の書物を読んだので、女の身体に何が備わっているのか、女とはいったい何者であるのか、女がどんなに穢れているかを知り尽くしていると自慢しては、女性

1) 以下、キャンノンとノーサンプトン村の二つの事例は、Mary Fissell, "Making a Masterpiece", in Charles Rosenberg ed., *Right Living: An Anglo-American Tradition of Self-Help Medicine and Hygiene* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 2003), 59-87に拠った。

たちをからかい、侮辱することを繰り返していた。女の身体のことを女よりもよく知っているとかえ彼らはうそぶいていたという。『アリストテレス宝典』のある版では、女性性器についての正確な知識を持つことが産婆にとって絶対に必要だから詳しく書くが、この記述を読んだ好色で淫らな人々によってからかいの種にされてしまうことを憂慮する身振りが取られているが、まさにこのテキストが予測したことが現実世界で起きたわけである。

マサチューセッツの片田舎の若者たちは、安価な産婆術の教本にあった女性性器の記述を読んで興奮し、女性の本性を極めつくしたと舞い上がって、同じ村の女性たちをからかい、彼女たちに威張り散らしていた。その粗野な稚さを笑うのはたやすい。あるいは、女性の性と性器を「穢い」と考えて女性を差別する態度をここにも見出して嘆息することもたやすい。この小論ではしかし、産婆術の書物が果たした逆説を強調したい。もともと女性にある種の専門的な知識を与えることを目標にして、場合によっては女性が生計を立てる時の支えとさえなった産婆術の教本が、家庭のささやかな本棚から青年たちの手に渡った時に、彼らと興奮させて、女性を不快にさせる行動に駆り立てたという逆説である。

まとめ

この小論が点描したエピソードはいずれも、18世紀の医学はエロティックな想像力に素材と方向性を与えたことを示唆している。スターンのマッサージュのパロディも、サドが描く世界も、瀉血を求めてさまようポーツマス伯爵も、いずれも医学の理論と実践を素材にして、性交そのものとは違う性の快楽を想像していた。18世紀のエロティカやポルノグラフィについて、性交に圧倒的な重心が置かれているという特徴が研究者たちによって指摘されており、それは正しいのだろう。しかし、18世紀の医学のコアは、全身をめぐる体液を中心にしたホリスティックな医療であり、性器や特定の性感帯に〈セクシャルなもの〉〈エロティックなもの〉を局在させることなく、さまざまな部位と身体操作へとエロティシズムの想像力を向ける可能性を内在させていたと言える。

それに対し、産婆術書を読んで興奮した青年たちの問題は、性器の直載な記述を読んで興奮したという点で単純に見えるかもしれないが、文化の構造の問題としてはより複雑である。ここには、

医学出版の普及と女性のステータスをめぐるジェンダー・ポリティックスという問題がある。イングランドで16世紀以来拡大した俗語による医学書の出版の中で、特に重要だったのが17世紀以来数多く出版された産婆術の書物である。これらの書物の著者の中には、ジェイン・シャープやセアラ・ストーンなど、産婆の経験を積んだ女性の著者も少なからずいた。文学の世界と同様に、17世紀から18世紀の産婆術書の世界は、男性によるオーサーシップの独占が少なくとも部分的には崩れており、女性が一人称で医学知識を語る主体となる確かな萌芽があった。あるいは、産婆術書の女性の著者は、その書物の中で、若い産婆志望の女性に知識を伝達する、経験を積んだ女性教師というペルソナをまとっていた。それと並行して、産科病院で教育を受けた男性の外科医たちは、伝統的な産婆を無学で危険として攻撃していた。産婆術の書物は、医学知識の生産と伝達と消費の仕方におけるジェンダー秩序のゆらぎと、それに対する反応・反動を最も大きく表している領域であった。

その意味で、17・18世紀の産婆術の世界は、同時代の代表的なポルノグラフィが設定するフィクションの世界と共鳴している。『娘たちの学校』『女のアカデミー』などの著名なポルノグラフィのタイトルからも明らかのように、女性たちが淫らな会話を語る状況に、知識の伝達と学問が営まれる空間を現す言葉を用いるという仕掛けが、当時のポルノグラフィに最も好まれた形式であった。語りの形式の問題で言えば、『ファニー・ヒル』は女性の一人称の語りであり、ピエトロ・アレッティーノの『ラジオナメンティ』以降、性の経験を積んだ女性と若い女性の会話という形式は、ポルノグラフィの常套的な形式であった。これらはいずれも女性著者による産婆術書が採用する知識の伝達の形式であった。即ち、17・18世紀のポルノグラフィは、間接的な仕方であるが、同時代の産婆術をめぐる新しい状況のパロディになっているのである。

このような18世紀のジェンダー・ポリティックスが、産婆術のテキストに興奮した村の青年たちの背後に存在している。女性自身よりも女性のことを知っているとうそぶいた彼らは、18世紀の男性産科医たちとポルノグラファーの双方の姿を映し出しているのかもしれない。

(慶應義塾大学教授)

エロティックな「わたし」

吉田直希 Yoshida Naoki

エロティカ(erotica)のO.E.D.初出は1854年である。だからといって、18世紀にエロティカと呼べる作品がなかったわけでは決してない。啓蒙主義とは、無数の好色文学を生み出したまさに「理性(!?)」の時代の思想であった。エロティカ発信の地フランスでは、『哲学者テレズ』に代表されるポルノグラフィの出版が激増したが、この手の本はカタログ上「哲学書」に分類されていた。これは書籍商の隠語であり、表の世界で流通させることのできない禁書あるいは取り扱い注意の書籍を指していた。もちろん、アプナイ哲学書に国境などない。当然のごとく英国にも次々と輸入され、スウィフト、フィールドング、スターンらも愛読(?)していたようである。では英国からの輸出はどうだったかという点、『ファニー・ヒル』はフランスでもベストセラーに名を連ねている。仏訳版『娼婦』(Fille de joie)は、検閲の目をごまかすために表紙は聖書、中身はファニー・ヒルという手の込んだ装丁で密かに取引されていたらしい。エロティカのおもしろさはこの種の偽装に隠されている。本論では、18世紀エロティカの偽装を見事に暴くRobert Darntonの研究を出発点とし、ポルノグラフィ誕生の歴史的意義について考えてみたい。

ジャンルの多様性

さて、18世紀の禁書取引の実態を詳細に調べ上げたダーントンであるが、彼がたどり着いた結論は少々つらいものだった。当時の読者がどのようにエロティカを読んだのか、それを知ることが不可能だというのだ。なぜなら、エロティカという枠組みがなかった時代に書かれた作品を、性的興奮という観点から論じ、読者の反応を推量したとしても、それは全くの時代錯誤となってしまうからである。そこで彼は方針を転換した。『娼婦』をはじめとする当時の「哲学書」がいかに多様なジャンルにまたがる言説であったかを明らかにしようとしたのだ。そうすれば、「純粋な」エロティシズムを追求しようとする悪しき本質主義も退けられる。たしかに、一読してわかるように『フ

ァニー・ヒル』では、性行為や性器の描写にあからさまな表現は使われていない。たとえば、娼婦ルイザと白痴少年ディックの刺激的なセックスシーンには、ラ・メトリの『人間機械論』を明らかに意識して書かれたと思われるmachineという単語が何度も登場し、クライマックスでは彼も彼女も機械と化す。また、読者が目をシロクロさせるこの場面は、Negroesへの言及からもわかるように、当時の人種問題をも示唆しているのだ。あるいは、vagina(もちろんこの語も作品中では一度も使われることはないのだが)を通して思索に耽る「哲学者」ファニーが、natural philosophyに没頭する場面にも出くわす。さらに、コル夫人の売春宿はabbessと呼ばれており、そこではキリスト教の儀式ののちでバラエティ豊かなセックス・ドラマが上演されている。ようすに、Peter WagnerがEros Revivedで詳細に述べているように、18世紀のエロティカは性を題材としながらも、性以外の何か+αをつねに呼び起こす仕掛けになっているのである。関連するジャンルの多様性、それが『ファニー・ヒル』を18世紀の隠れたベストセラーにした大きな要因と考えられるだろう。

エロティカと階級/小説の勃興

近代以前、エロティカの読者層は主に上流階級に限定されていた。ところが18世紀になるとこのジャンルは幅広い読者層を獲得する。特に顕著な変化は、中流階級が主たる購読者として登場したことだろう。さてJan Wattによれば、小説の勃興と中流階級の台頭は歴史的に一致する。だが、彼の小説の定義に『ファニー・ヒル』は含まれない。中流階級は独自の道徳的価値観を表す「小説」というジャンルによってアイデンティティを確立したとする彼の考え方にすれば、ジャンルそのものが入り乱れたエロティカは当然対象外となるしかない。

では、それにもかかわらず、なぜこれほどまでに多くのエロティカが中流階級によって消費されてきたのだろうか? 彼らが小説だけでなく上流